

『延慶本平家物語』の「まさなし」・「きたなし」と「うたてし」

——語句分析から伝本の相違を考える(二)——

城 阪 早 紀

はじめに

平家物語伝本の性格の相違を、同一語句の使用の様相から明らかにすることを目的として、前稿^①では『覚一本平家物語』(以下「覚一本」)の「まさなし」と「うたてし」を検討した。どちらも負の評価を示す形容詞で、次のように使われる。

一、覚一本に「まさなし」は8例あり、戦場で敵(や利害関係のある味方)の言動を、規範に基づく意識や共通感覚によってとがめる語である。

二、覚一本に「うたてし」は、関連語を含めて22例ある。自身に向けられる場合には、自らの立場に不相応な憂き目をみることへの悲嘆をあらわし、覚一本においては、平家一門など滅び行く人物の心情をいうことが多い。また他者に向けられる場合には、立場

『延慶本平家物語』の「まさなし」・「きたなし」と「うたてし」

にふさわしい行動を取れないことへの落胆をあらわす語で、覚一本においては、世を乱した藤原成親・源頼政・平宗盛や、平家滅亡をもたらした平清盛への人物評としても機能している。

この結果を踏まえ、本稿では『延慶本平家物語』(以下「延慶本」)の用例を検討する。延慶本においても、戦場で敵にうしろを見せることに対して「まさなし」と「うたてし」が使われており、さらに「きたなし」と言う例もある。これら三語の意味・用法は、覚一本とどのように異なるのだろうか。

特に「うたてし」は延慶本においても批評句として用いられており、編者が物語中の出来事をどのように捉えたかを窺い知ることができる語といえる。依拠資料の痕跡を多く留めるとされてきた延慶本の語句の全用例を検討することは、その編纂方針を再考する手がかりになろう。

一、覚一本と延慶本の語句

小林美和氏は延慶本の「文体が唱導的な語りのスタイルを踏まえ」（傍点ママ。以下同）ていることを、「今ノ……ハ是也」の語り口、地の文の文末表現「トカヤ」・「ヤ」「哉」・「カシ」、著述者の批評句「浅猿シ」「口惜シ」「糸惜シ」「ヲカシ」から検討した。

氏は延慶本には「語り本等に比して著述者自身の価値観、主観を示す批評句がずい分と高い頻度で出てくる」と述べ、なかでも「著述者の批評句として」「文末に登場する例」に着目する。たとえば「浅猿シ」は「王法仏法や政道の乱れを説く唱導の常套句」、「糸惜シ」は「愛別離苦の唱導を支える常套句」というように、「その各々の説話のテーマを端的にあらわしている」と指摘する。そして延慶本の「これら一語一語に込められた意味は意外に重く」「王法と、山門を中心とする仏法、或いは争乱に伴う愛別離苦のならいを説くに、これらの語句は敏感に機能している。」として、「従来屢々みられた、雑纂的テキスト、或いは殆ど無原則に傍系説話を取り込んだ後期増補本という評価とは裏はらに、本書にはかなり明瞭な文体意識若しくは説話構成意識が窺われる」と結論する。

なかでも、「雑纂的」と目されることの多かった延慶本の語句に着目し、「文体意識」や「説話構成意識」を認めた点は、延慶本を

理解する上で重要なものと思われる。

延慶本が依拠資料を取り込む際に行った編集は、どのようなものだったのだろうか。それは説話内部の表現、すなわち地の文全体や人物の発話・心情にまで及ぶ場合もあったのだろうか。編集のありようを知るには現存資料に拠って検証する方法が有効だが、それも資料の限界があるろう。そうであるならば別の方法からも、たとえばいま伝わる延慶本から、それを知る手立てを考える必要がある。本稿では延慶本の語句に着目し、地の文の用例に認められた特徴が、登場人物の発話や心内語の用例と関わるのかを検討することによって、延慶本の編集態度を読み解くことを試みたい。

また、覚一本と延慶本の語句を比較したものととして、松尾華江氏^⑤の論考がある。氏は、覚一本が「多くの人が（現代の我々のみならず）、中世の三百年以上に亘って、『平家物語』（原文一重括弧）として認知し」、「平家物語が古典としての地位を確立するのに与って力あった」本文であり、延慶本が「古態本として平家物語の成立事情を論じる際に用いられる」、「いわゆる『思想』的な、生の記述を露出する箇所が多い本文」であると説明する。これらを「十四世紀の平家物語の、ある達成を示す本文」と位置づけ、両本を「起点」として、「諸本の流動の幅を含みこんだ、『平家物語の世界』の総体」を描き出すこと、「平家物語の世界の基盤」を解明することを

目指す。

具体的には、「歴史文学としての平家物語の論理」である「無常」やそれに類する成句という、用例数に差のある語を取り上げる。覚一本は6例と「使用を抑制」し、「高倉院死去、清盛死去、安德帝入水、女院の仏道生活」という「重大事」に置くことで「物語の基調を統一することに成功した」と述べる。延慶本が32例と多いのは、「多様な記事を抱えこ」み、「あたかも駭然たるこの世界全体を囲いこもうとするかのような視野の拡がりを示す」ために、「一定の方角づけを与え、同じ色調で統一する必要があった」のではないかと述べる。

また「評語」「めでたし」について、覚一本では54例中30例前後が「平家一族及び皇族（高倉天皇・建礼門院・安德天皇等、平家ゆかりの皇族）」に用いられ、前半の「めでたき」「世界」から「運命の坂を転がり落ち」、後半の「めでたかりし」時を思い出して「悲歎にくれる」、「平家一族の姿」を照らしていると読み解く。他方、延慶本の例が少ないことについて、「語り手自身の評言」や「感情語」でなく、「世人の評、もしくは複数の人々の評判という形で事態の叙述をしめくくる例」が多いからではないかと推察する。そして、これは「覚一本と延慶本（及びそれに代表される読み本系諸本）」との質的相違を示す好例ではないか」と述べる。

『延慶本平家物語』の「まさなし」・「きたなし」と「うたてし」

稿者もまた、平家物語理解のためには、覚一本と延慶本を起点とすることが目下有効な方法と考える。松尾氏の「諸本の数だけの平家物語論が、まず書かれねばならない」という問題提起は、今なお重要な課題といえよう。

二、「まさなし」と「きたなし」

さて、本稿が問題とする語句の分析を行う。延慶本には、武士の行動に対して「うたてし」と言う例が6例あり、「まさなし」の発せられる場面と接近している。ただし延慶本の「まさなし」は3例で、覚一本の8例に比して少ない。

延慶本に「まさなし」の例が少ない理由として、類似した場面で「きたなし」を使うことがあげられる。本章ではまず、「まさなし」と「きたなし」を検討しておく。

①「まさなし」

延慶本の「まさなし」3例は、全てが会話文で、戦場で武士が敵に対して言う場面で用いられる。覚一本と共通する1例は、用例番号を○で囲む。

次の2例は、一谷で熊谷直実が平敦盛に、粟津で石田為久が木曾義仲に「まさなし」と言う例である。これらは覚一本と同様に、戦

場で敵に「後スガタ」を見せたことをとがめるものである。

① (敦盛) 「(直実) アレハ大将軍トコソミ進候へ。マサナウモ候御後スガタカナ。返合給ヤ」 (五本・廿五「敦盛被討給事」)

2 (義仲) 「(為久) 大将軍トコソ見奉候へ。マサナシヤ、源氏ノ名ヲリニ、返シ給へ」 (五本・九「義仲都落ル事」)

① (敦盛) は副詞的用法である。「形容詞連用形+もくかな」という構文で、敦盛が後姿を見せたこと(客観的事実)に対する直実(話者)の評価が示されている。同様の構文は、「きたなし」に4例、「うたてし」にも3例みえる。^{⑦)}

残る1例は、横田河原合戦での詞戦にみえる。まず富部三郎家俊が名のると、それを聞いた佐井七郎弘資が「和君ハ弘資ニハアタワ又敵」と言つて名のり返す。家俊は弘資に「アタワ又敵」と言われる筋合いはないとして「マサナキ男ノ詞」と言う。

3 (弘資) 富部三郎取アヘズ、「…其子富部三郎家俊トテ、源平ノ末座ニ付ドモキラワレズ。汝ヲコソ 蒿きよこタケレ。マサナキ男ノ詞哉」 (三本・廿六「城四郎与木曾合戦事」)

以上が「まさなし」の全例である。続いて「きたなし」の例を検討する。

② 「きたなし」

延慶本に「きたなし」は11例あり、覚一本の2例に対して多い。

「きたなし」は、「けがれていて感覚的に遠ざけたい物事のさま」(『角川古語大辞典』)をあらわす語であり、次の、「童部」から「物狂」と笑い罵られる「法師」の装束をいう例が、それに相当する。

・ソノサマヲミレバ、人ニモアラズ、ヤセクロミタル法師ノ、カミギヌノキタナキガ、ワラくトヤレタルガウヘニ、アサノ衣ノコ、カシコ結び集メタルヲ、… (六末・卅四「阿波守宗親発道心事」)

残る10例は戦場での行動をとがめる発話にみえ、「まさなし」との類似が窺える。こうした場面での「きたなし」は、一般に「心、氣持、動機などが、自分中心でみにくいさま」(『日本国語大辞典』)をいう例に分類され、特に軍記物語では「卑怯だ。見ぐるしい」(『平家物語辞典』)といった意を持つ。

次の5例(1~5)は、敵にうしろを見せたり、戦場から退く行為を言う例である。

1 (忠度) 「(忠澄) 源氏ノ大将軍ニハ、カネ付タル人ハオワセヌ者ヲ。キタナクモ敵ニ後ヲバミセ給物カナ」 (五本・廿二「薩摩守忠度被討給事」)

2 (行家) 昌命モツゞキテ入ル所ヲ、小太刀ニテ左ノ股ヲヌイサマニゾ突タリケル。昌命サ、レテ、「キタナクモ引セ給物哉。出サセ給へ。勝負仕ラム」 (六末・廿二「十郎藏人行家被擲事」)

1 忠度は「御方ゾ」と偽って「落」ちようとするが、金黒であったため平家方であることが明らかになる。2 行家は激しい打ち合いに堪えかねて塗籠の内に「逃入」り、追つて来た昌命を不意打ちにする。ここでは、戦場から退いたことにくわえ、味方と偽ったり、不意打ちを仕掛けた行動を責める意味で、「きたなし」が選択されていると考えられる。

ただし次の3例は、忠度や行家のように、敵を欺く行為があるわけではない。

3 (円満院大輔) …シヅくト落行ケルヲ、敵追懸テ、「イカニく、カヘシアハセヨヤ」。キタナクモ後ヲバミスル者哉」

(二中・十八「宮南都へ落給事」)

4 (頼朝) 暁方ニナリテ、兵衛佐ノ勢、土肥ヲ差テ引退ク。(中略) 荻野五郎末重・同子息彦太郎秀光以下、兄弟五人、兵衛佐ノ跡目ニ付テ追懸リテ、「此先ニ落給ハ大將軍トコソ見申セ。イカニ源氏ノ名折ニ、鎧ノ後ヲバ敵ニミセ給ゾ。キタナシヤ。返合給へ」

(二末・十三「石橋山合戦事」)

5 (貞任) 貞任、城ノ後ロヨリ、クヅレオチテ逃ケルニ、一男八幡太郎義家朝臣、衣河ニ追下テ責付ツ、「ヤ、キタナクモ逃出ル者哉。暫ク引ヘヨ」

(二中・廿「貞任ガ歌読シ事」)

3は橋合戦で円満院大輔が、4は石橋山合戦で頼朝が、5は奥州合

『延慶本平家物語』の「まさなし」・「きたなし」と「うたてし」

戦で貞任が、敵にうしろを見せることに對して言う例である。具体的には、「落行ケル」(円満院大輔)ことや、「引退ク」・「落給」こと(頼朝)、「逃ケル」・「逃出ル」こと(貞任)が「きたなし」と非難されている。

次の例は、先陣を争うなかで味方を「だしぬく」ことを「きたなし」という例である。

6 (高綱) 梶原此ヲミテ、「キタナシ、ワギミニハダシヌカルマジキモノヲ」

(五本・七「兵衛佐ノ軍兵等付宇治勢田事」)

他にも、敵を嫌って戦わないことを「きたなし」と非難する例などがあり、延慶本は敵(と利害関係のある味方)の行動を非難する語としてひろく「きたなし」を用いている。

覚一本でも「きたなし」は、戦場での行動を非難する語であるが、2例とも仲間内で使う語であり、敵の言動をとがめる「まさなし」とは一線を画しているように思われる。^⑩

延慶本では「きたなし」と「まさなし」の発せられる状況が似通っているものの、「まさなし」と言われた敦盛と義仲は、助け船に乗る、自害のために松原へ行く、というように、戦場を離れる理由が説明されていた。そのため、敵にうしろを見せると同じ行為であっても、非難の程度が低い「まさなし」が使われていると考えられる。

以上の例から考えるに、「まさなし」が規範に基づく意識や共通感覚に照らして否定的な評価を下す語であるの対し、「きたなし」はより非難の度合いが強く、感覺的な判断をあわせ持つ語であるといえよう。¹²⁾

三、「うたてし」

延慶本には、形容詞「うたてし」が24例あり、その関連語10例¹³⁾を合わせると34例である。覚一本が22例であったので、分量差を考慮すればほぼ同率であるが、どのような違いが認められるだろうか。

34例の内訳は、地の文13例、会話文19例、心内語2例である。覚一本と共通する例(7例)を引用する際には、用例番号に○を付す。前章との関わりから、まずは武士の行動への「うたてし」(6例)を検討する。次の2例は、従者が主に対して「うたてし」と言う例である。

- 1 (宗盛ら)「貞能」…何事モ限有事ナレバ、今ハ平家ノ御運コソ尽サセ給ヌラヌ。サレバトテ、叶ワヌ物故ニ、敵ニ後ヲ(ミ)セム事ウタテク候」(三末・廿八「筑後守貞能都へ帰り登ル事」)
- 2 (頼政)競ハ此事聞テ、「ウタテクモ此事ヲバ知セ給ハヌ者哉。只今参ラムト思ヘドモ、右大将宗盛ノ向ヒ也。…」(二中・十三「源三位入道三井寺へ参事」)

1は都落する一門を、貞能が引き留めようとする場面である。「敵ニ後ヲミセ」ることを言う点は、「きたなし」・「まさなし」と同じである。ただしこの例は、主である宗盛への発言であるため、行動を非難する「きたなし」や、とがめる「まさなし」よりも、「そのような行動を取るなんて」と、立場に相応しくない行動への落胆を伝える「うたてし」がよりふさわしい。

2は、高倉宮謀叛の露見に伴い、頼政から供せよという命がなかったことを「うたてし」と言う。これも、頼政ともあろう人が知らせてくれないとは、という含みがある。

次の例は、戦場で、僧兵が敵に対して言うものである。

- 3 4 (清盛)「ソレホド臆病ナルモノ、大将軍スル事ヤハアル。大政入道殿、心オトリシ給タリ。アレホド不覚ナル者共ヲ、合戦ノ庭ニ指遣ス事、ウタテアリヤ」ト云テ、舞カナヅル者モアリ、オドリハヌル者モアリ。(二中・十八「宮南都へ落給事」)
- 橋合戦で宇治川を前に攻めあぐねる平家軍を、三井寺の僧兵が「うたてあり」と挑発する。清盛ともあろう者が「不覚ナル者共」・「臆病ナルモノ」を「合戦ノ庭ニ指遣ス」とは情けないと囃し立てる例である。¹⁵⁾

こうした例から、「まさなし」や「きたなし」が相手をとがめたり非難する語であるの対し、「うたてし」は自身の落胆を示す語

であるという違いが読み取れる。¹⁶⁾

そして「まさなし」と「きたなし」の使用基準が覚一本と延慶本とは異なること、敵の行動をとがめる語として、覚一本は「まさなし」を使うが、延慶本は「きたなし」を多く用いるという違いが認められる。

A 地の文(13例)

さて延慶本編者が、物語中のどのようなことに対して「うたてし」と評しているのかを検討する。地の文13例は、全てが編者の評である。

平叙文の述語として使われる例には、係り結びを用いたものが多し。覚一本では、地の文13例中11例が係り結びの形式で、うち10例が「こそうたてけれ」で定型句化していた。延慶本にも表現は一樣でないものの地の文に5例が認められる。

また、章段・段落の冒頭・末尾に位置する例は、覚一本が8例であったのに対し、延慶本では章段冒頭に2例(7人の心、⑪清盛)あるのみである。覚一本は「うたてし」を物語内容を統括する場面で用いるが、延慶本は異なる傾向を持つことが予想される。

以下用例を、前稿¹⁷⁾と同様に対象による分類によって示す。

『延慶本平家物語』の「まさなし」・「きたなし」と「うたてし」

1 他人の不適当な行動・振舞に対する感情 8例

1の1 ある行動 4例

人物の具体的な行動を「うたてし」という例は、4例ある。

⑤ (京中者共) 京中者共、元ヨリ案内ハ知タリケリ、勸賞蒙ムトテ、我モくト尋求ケルゾウタテキ。

(六末・十六「平家ノ子孫多ク被失ハ事」)

京の人々が「勸賞」欲しさに平家の子孫を求めてしまうことをいう例を含め、3例は覚一本と共通である。¹⁸⁾ 残る1例は伊東助親が娘と頼朝との子(千鶴)を殺すよう命じて郎党に渡すこと(二中・卅八)を言う例である。

1の2 世を乱す人物 1例

事件を引き起こし世を乱した人物への「うたてし」は、覚一本では成親・宗盛・頼政の3例であったが、延慶本は頼政のみである。

⑥ (頼政) : サテヲハスベカリシ人ノ、由ナキ謀叛起シテ、宮ヲモ失ヒ奉リ、我身モ亡ビ、子息・所従ニ至ルマデ亡ヌルコソ、ウタテケレ。サテモ、件ノバケモノ、アマタ獸ノ形有ケン、返々不思議ナリ。

(二中・廿八「頼政ヌヘ射ル事」)

三位出世の由来として鶴説話を語り、「由ナキ謀叛」を起こした頼政を難じるのは覚一本と同様である。ただし延慶本の関心は、続く一文で再び「件ノバケモノ」(鵜)に戻っており、頼政への「うた

てし」という評価は話末評をなしていない。

1の3 心のありよう 2例

7 (人の心) 源氏ノ世ニ成タリトモ、指セル其ユカリナラザラム者ハ、何ノ悦カ可有ナレドモ、人ノ心ノウタテサハ、平家ノ方弱ルト聞バ内々悦、源氏ノ方ツヨルト聞バ、興ニ入テゾ悦アヒケル。

(四・廿二「木曾都ニテ悪行振舞事」)

8 (人の心)「(マ男)盛次ヲ擲テモ誅テモ進セタラム者ニハ勸賞行ワルベキヨシ、鎌倉殿ヨリ披露アリ。哀、イツクニカ有ラム。擲テ勸賞ヲ蒙バヤ」ト云ケレバ、人ノ心ノウタテサハ、マ男ニヤ移リケム、此女、「ワラワコソ知タレ」ト申ケレバ、

(六末・廿九「越中次郎兵衛盛次被誅事」)

源氏が勢力を伸ばしたと聞けば、源氏にゆかりない者も浮き足立つ。7はこうした世情に流される「人ノ心」を批判している。8も源氏の世になり、「勸賞」欲しさに盛次の居場所を密告してしまう「人ノ心」を嘆いている。

78は「人ノ心ノウタテサハ」という表現で、望ましくない行動を引き起こす心のありようを難じる例だが、覚一本にはこうした「心」に関心を寄せる例はない。平家の世から源氏の世へと変わりゆくありさまを見つめ、世にあるうとしてしまう「人ノ心」への嫌悪を示す点に、延慶本の特徴がある。⑨なお、「くノウタテサハ」

の表現は、次の9と会話文の22(義王)にもみえる。

1の4 ある階級 1例

9 (人の所従)：争カ是ヲ尋出ムト、北条思居タリケル程ニ、人所従ノウタテサハ、主ノ世ニ有程ハ随ヘドモ、主迷者ニ成ヌレバ、還テ敵ニナルラン風情シテ、惟盛ノ北方ノ忍テオワシケル所ニ仕ケル女、忍テ北条ガ宿所六ハラニ行向テ申ケルハ、

(六末・十七「六代御前被召取事」)

維盛北の方に仕える「女」が、六代の居所を北条に密告をする。主が世にある時は付き従うが、主が惑い者になれば翻って敵となる。欲心にまどいかつての主を裏切ってしまう「所従」という階級への不快感をいう例だが、世にあるうと思う人の心を難じる点は7や8と通じ合う。

2 他人の不遇・不運に対する感情 4例

⑩(高倉宮)抑、以仁ノ王ト申ハ、正キ太上法皇ノ御子ゾカシ。位即キ世ヲ知食トテモ、難カルベキニ非ズ。其マデコソマシく、ザラメ、カ、ル御事アルベシヤハ。何ナリケル先世ノ御宿業ノウタテサゾト、思奉ルモ甲斐無カリシ事共也。

(二中・廿一「宮被誅給事」)

⑪(清盛)抑、入道最後ノ病ノ有様ハウタテクシテ、悪人トコソ思

へドモ、実ニハ慈恵大師ノ御真ナリトイヘリ。

(三本・十四「大政入道慈恵僧正ノ再誕ノ事」)

右の2例は覚一本と共通だが、その文脈は異なっている。⑩高倉宮は、覚一本では南都の援軍が間に合わず討たれた「御運のほど」を「うたてし」と言っていたが、延慶本では「太上法皇ノ御子」でありながら謀叛に関わって討たれた「先世ノ御宿業」を「うたてし」と言う。このことは後述の、20(後白河法皇)が「十善ノ位」に生まれながら「先世ノ罪報」のために法住寺合戦を引き起こしてしまったという認識と重なる。

また⑪清盛も、覚一本では「さい後の所労のありさま」を「うたてし」と言っていたところ、延慶本では、「悪人」だからそのような死に様になったと、仏教的な解釈をくわえる。²⁰⁾

3 ある不本意な状況に対する感情 1例

12(仏事の行われないこと) 人ノシヌル跡ニハ、アヤシノ者タニモ、ホドくニ随テ、朝暮例時懺法ナムドヨマセテ、金打ナラスハ常ノ習也。是ハ供仏施僧ノ営ニモ不及バ、報恩追善ノ沙汰ニモ非ザリケリ。明テモ晩ニテ、軍合戦ノ営ヨリ外ノ他事ナカリケリ。ウタテク心憂カリシ事也。

(三本・十三「大政入道世界」)
清盛の死後、「供仏施僧の営」「報恩追善の沙汰」が行われなれず、

『延慶本平家物語』の「まさなし」・「きたなし」と「うたてし」

「軍合戦の営」ばかりであることを「うたてし」と言う。続いて「人」の弾指があり、清盛の遺言とはいえ、「仏事孝養」を行わず、「七珍万宝」を惜しむ平家一門を非難する。

地の文の検討から、延慶本編者は、世にあるうとするあまり取ってしまう行動や、それを引き起こす心のありよう、あるいは仏事や弔いが行われないことに対して「うたてし」を用いることが認められた。続いて、会話文・心内語の例を検討する。

B 会話文・心内語(21例)

会話文・心内語は、34例中21例(62%)を占める。覚一本の22例中9例(41%)よりも高率である。話者を見ると、平家方の人物は、維盛2例・知盛のほか、重衡北の方を入れても4例にとどまる。また、人々の評言が3例あり、後白河法皇・崇徳院の発話も1例ずつ見える。

1 自身の不遇・不当な状況に対する感情 6例

13(維盛)「…重衡卿ノ被生取ニテ、京・鎌倉こまろハル、ダニモ心憂ニ、此身サヘ恥はづかしラサラシテ、父ノ骸ニ血ヲアヤサム事ウタテケレバ、是ニテ出家ヲシ、水ノ底ニモ入ナムト思フゾ。…」

(五末・十「惟盛卿高野詣事」)

14 (維盛)「…本三位中将ノ被生取^ニテ、京・鎌倉^ヲサ^ラスタ^ニアル^ニ、我サへ捕へ搦ラレム事モウタテケレバ、思念ジテ加様ニ髪ヲ下シテシ上ハ、今更妄念有ベシトモ覚ヘザリシニ、…」

(五末・十九「惟盛身投給事」)

15 (小督)「…入道ノ方サマニ、安カラヌ事ニシテ、召出テ可被失^ニナムド聞ヘシカバ、心憂悲テ、ゲニモサ様ノ事アラバ、乍^生恥^ヲ見ムモウタテクテ、君ニモシラレマヒラセズ、人独ニモ不被^知シテ、…」

(三本・五「小督局内裏へ被召事」)

13は維盛が屋島を抜け出た経緯を時頼入道に話す場面である。都に戻つて妻子に会いたい、重衡が京・鎌倉へ引かれることさえ「心憂」く思うのに、自分まで恥をさらし、さらには父の名をはずかしめることは「うたてく」思うとして、出家・入水の願望を語る。維盛は入水直前の14でも、同じ心情を吐露する。

15小督は、高倉天皇の使である藏人仲国に、内裏に戻れば清盛の手にかかり「乍^生恥^ヲ見^ル」であろうことを「うたてく」思うので、明日には大原の奥へ行き、出家するつもりであると伝える。これら3例は、世にあることを厭わしく思い、仏道に入ることを望む文脈にある。

16 (重衡北の方)「…待ヲ北方召テ、「…跡ヲ隠ベキ者ノ無コソウタ

テケレ。サリトテハ誰ニカ云ベキ。行テ最後ノ恥ヲカクセカシ。

ムクロヲバ野ニコソ捨ンズラメ。夫ヲバイカニシテカキ返セ。教養セン」

(六本・卅五「重衡卿日野ノ北方ノ許ニ行事」)

重衡北の方は、重衡の斬首後に「跡ヲ隠ベキ者ノ無」いことを「うたてし」と言う。「最後ノ恥ヲカク」すため、侍に「ムクロ」を引き取らせ「教養」しようと言う。

覚一本では、重衡や知盛のように平家方の人物が、滅び行く身上を「うたてし」と嘆く例が目立った。延慶本にも平家方の人物が「うたてし」と言う例もあるが、こちらは世にあつて恥をさらすことや、弔いが行われないことを嘆き、「出家」や「教養」を望むという違いがある。小督の例も、覚一本のように清盛への嫌悪の情を示すというより、もつと普遍的に世を厭う意味合いが強いように思われる。

17 (後白河法皇)「末代コソウタテク心ウケレ。強ニカクシモヤ有ベキ」トゾ被仰ケル。近ク召仕ヘケル人々モ、「更ニ人ノ上ト非可ニ思フ。何ナル事カ有ムズラン」ト安キ心ナシ。

(二末・十六「丹波少将成経西八条へ被召事」)

鹿谷事件が露見し、後白河法皇は清盛に召された近臣成経を見送る。自身の思うままにならない「末代」を「うたてし」と嘆き、「強ニ」事を進める清盛への非難を口にす。法皇という立場にあ

る人が、遭うはずのない憂き目にあうことを「うたてし」と言う例だが、近臣らは法皇が「人ノ上」（他人事）と思うさまを案じる。

残る1例は、崇徳院（讃岐院）が、「五部の大乘経」を流罪地に捨て置くことを「うたてし」と言い、都近くに置くよう懇願する例（一末・卅六）である。

延慶本においては、後白河法皇や崇徳院も身の上を嘆く一人である点が注目される。

2 他人の不適当な行動・振舞に対する感情 11例

2の1 ある行動 7例

先述の、武士の行動をいう例（6例）が相当する。²¹⁾

2の2 心のありよう 3例

18（俊寛）童爪ハヂキヲハタ／＼トシテ、「穴ウタテノ御心ヤ。其程ノ御身ノ有様ニテモ、猶世ノヲソロシク被思食候カ。又御命ノ惜ク渡セ給候カ。ハタラカセ給ヘバトテ、ウルハシキ人ノ御形ト被思食候カ。只ナマシキ骸骨ノハタラカセ給ニテコソ渡セ給メレ」
（二本・十八）「有王丸油黄嶋へ尋行事」

19（公忠）況、公長父子ハ平家重代相伝ノ家人、新中納言ノ御許ニ朝夕祇候ノ侍也。「人ノ世ニアラント思コソウタテケレ」トゾ申ケル。
（六本・卅四）「大臣殿父子并重衡卿京へ帰上事」

『延慶本平家物語』の「まさなし」・「きたなし」と「うたてし」

18 俊寛は、人が渡つたと聞こえれば罪が重くなるから「トク／＼帰リ上リネ」と有王に言う。有王は、京から遠く離れた鬼界島（油黄嶋）で「骸骨」のような姿になってなお、世を恐ろしく思い、命を惜しく思ってしまう俊寛の「心」のありよう嘆いている。

19 は人の評言である。「平家重代相伝ノ家人」でありながら、宗盛を斬つた公忠に対し、「人ノ世ニアラント思コソウタテケレ」と言う。ここでは宗盛を斬るという行為のみならず、より普遍的に、世にあると思う人の心を「うたてし」と難じている。²²⁾

2の3 世を乱す人物 1例

20（後白河法皇）「法皇ハ古ニモコリサセ給ワズ、又カ、ル云甲斐無事引出サセ給テ、万人ノ命ヲ失ハセ給、我御身モ禁獄セラレサセ給ヘル事、責ノ御罪ノフカサ、先ノ世マデモウタテケナム」トゾ、貴賤上下、遠近親疎、躰ヲシテゾ申合ケル。²³⁾

（四・廿六）「木曾六条川原ニ出テ首共懸ル事」
20 は法住寺合戦を企て惨劇を招いた後白河法皇を、「貴賤上下、遠近親疎」が嘆かわしく思う例である。法皇の「御罪」は重く、それをもたらした「先の世」（前世）までもが「うたてく」思われると言う。この文言は、後の場面で法皇の発言として繰り返される。

法皇仰ノ有ケルハ、「我国ハ辺地粟散境ト云ヘドモ、我先生ニ十戒ノ力ニヨリテ、十善ノ位ニ生ナガラ、又何ナル先世ノ罪報

ニテ、一度ナラズカ、ルウキ目ヲ見ラムト、国土ノ人民ノ思覧
コソハツカシケレ」

(四・廿七「宰相脩憲出家シテ法皇御許へ参事」)

右の引用について武久堅氏は、「前生」の「十戒ノ力」によって「十善ノ位」に生まれながら、「先世ノ罪報」によって争乱を起こしてしまった「法皇は『法住寺合戦』を『人民』の手前、己が去就を『恥じ』ねばならなかった人として延慶本平家物語は造形して不都合ではないと認識把握している」と述べる。

法皇モ寄怪ニ被思食ケレバ、ハカくシク人ニ被ニモ仰合不
及、ヒシくト思召立テ、法住寺殿ニ城廓ヲ構テ、

(四・廿三「木曾可滅之由法皇御結構事」)

延慶本では、後白河法皇が度重なる義仲の「狼藉」を「奇怪」に思
つて「城廓」を構える描写があり、主体的に合戦に関与しているこ
とが窺える。多くの人命を失い「無慚ノ事」を招いた法皇もまた、
「先世ノ罪報」に苦しむ一人である。

3 他人の不遇・不運に対する感情

2例

有王が俊寛のみすばらしい住居に同情して(二本・十八)、また
尼公は遠藤盛遠が娘と対面する機会がなかったことに同情して(二
末・二)、「うたてし」と言う例がある。

4 自身の不適当な行動・振舞に対する感情

4の1 ある行動 1例

21 (知盛)「……只一人持タリツル子ノ、父ヲ助ムトテ敵ニ組ヲ見
ナガラ、親ノ身ニテ引モ返サリリコソ、『命ハヨクヲシキ物ニテ
候ケリ』ト、身ナガラモウタテク覚候。人ノイカニ思ラム」

(五本・廿八「大夫業盛被討給事」)

一谷で知章を失った知盛の言葉である。自分を助けようと敵に組
む姿を見ながら、引き返すこともせず、生き延びてしまった。「身
ナガラモウタテク覚候」と、自身への落胆を口にする。

4の2 心のありよう 1例

22 (義王)「……実ニ加様ノタメシハ皆先世ノ事ナレバ、人ヲ恨ミ奉
ルニ不及。只身ノ程ノツタナサヲコソ思シカドモ、凡夫ノ習ノウ
タテサハ、思ハジトスレドモ、恨ミラレシ事モ時々有ツルナリ。」

(一本・七「義王義女之事」)

義王は、「先世」から決まったことなので、仏を恨んでも仕方な
い、恨まないでおこうと自分に言い聞かせたが、そうは思えない時
もあったと懺悔する。恨みの気持ちを抱いてしまう「凡夫ノ習」を
「うたてし」と言う。

会話文・心内語でも地の文と同様に、世に執着するために取って

しまう行動（俊寛・公忠）を難じる「うたてし」が認められた。さらに自身の身の上を嘆く例には、世にあつて恥をさらすこと（維盛・小督）や、恨みの気持ちを持ってしまう「凡夫の習」（義王）を疎ましく思い、仏道に入ることを望む例も認められる。

また、後白河法皇に関する例も2例あつた。意のままにならぬ「末世」を嘆く例と、法住寺合戦を引き起こした責任を問われ、「先の世」までもを「うたてし」と指弾される例である。延慶本においては、「うたてし」という語で世を嘆き、評される人物は、法皇を含む、世にある全ての人に及んでいる。

おわりに

以上、延慶本の「まさなし」・「きたなし」と「うたてし」を検討した。「まさなし」と「きたなし」は、戦場での望ましくない行動をとがめる武士の口語であるが、覚一本と延慶本とは、その使用基準が異なる。戦場でとつさに発する語としては、感覚的な側面を持ち非難の度合いが強い「きたなし」を用いる延慶本の方が自然であるように思われ、また覚一本がこれを排して「まさなし」を用いる点からは、戦場で交わす言葉をも物語中の一場面として構成しようという意図が窺えよう。ただしこの違いを、素材との距離に還元するのは早計である。延慶本であっても場面に応じた語を選択する

『延慶本平家物語』の「まさなし」・「きたなし」と「うたてし」

という意図を汲んでよく、覚一本と延慶本とが、それぞれに場面を整えたものと考えらるべきであろう。延慶本もまた、覚一本とは異なる視座から整えられた一つの編纂物と考えて良いように思われる。

「うたてし」について、たとえば有王が俊寛に向けた例¹⁸は、松尾葦江氏が「いかに主を思う愛情から出たとはいへ、『所従』の台詞としてはふさわしくない」、「作者の評言として、書かれるべき性質のもの」と述べ²⁰、また佐伯真一氏が、「延慶本等の有王は『所従』として俊寛に同情するよりも、その無残な状況を観察して因果応報を確認することを第一義としている」と指摘するなど議論のあつた本文である²⁰。本稿で検討した用例に立ち返つて考えると、世にあることを疎ましく思う心情は他の登場人物（維盛・小督）の発話にもみえ、それは編者の価値観と軌を一にするものであつた。延慶本の「うたてし」の語義と、編者の考えがしばしば登場人物の心情にも流れ込んでいることを踏まえるならば、有王の「穴ウタテノ御心ヤ」以下の発話は、俊寛を批判するものではなく、有王自身の、落胆のあまりあふれてしまった心情であり、それは編者の思想を反映したものであると解釈できよう。

覚一本の「うたてし」は、平家一門など滅び行く者の嘆きを示したり、世を乱した人物を非難したりする語であり、物語展開と関わつて、主要人物への評として使われる語であつた。対する延慶本の

「うたてし」は、立場を問わず世にある全ての人の、世を疎ましく思う心情や、世に執心する人への嘆きを読み取れる語であるといえよう。

注

① 城阪早起「『覚一本平家物語』の「まさなし」と「うたてし」——語句分析から伝本の相違を考える——」『同志社国文学』九五、二〇二一年一月。

② 『覚一本平家物語』の引用は、以下による。「影印」『平家物語』（龍谷大学善本叢書）思文閣出版、一九九三年。「翻刻」高木市之助ほか校注『平家物語（日本古典文学大系）』岩波書店、一九五九〜六〇年。引用の際には『日本古典文学大系』の判断を尊重し、促音・撥音を小字で補い、補読箇所も本文と同様に扱った。巻一〜六は上巻、巻七〜十二と灌頂巻は下巻である。

③ 『延慶本平家物語』の引用は、以下による。「影印」大東急記念文庫蔵本影印、汲古書院、一九八二〜三年。「翻刻」北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』勉誠出版、一九九九年（初版一九九〇年）。延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈』汲古書院、二〇〇五年〜二〇一九年。引用の際には『延慶本平家物語全注釈』の判断を尊重し、虫損などで判読しにくい箇所も本文と同様に扱い、補読箇所は「」で補った。所在は、（巻・章段番号「章段名」）で示したが、紙幅の都合から章段名の「付」以下は省略した。

④ 小林美和「延慶本平家物語の語りとその位置」『平家物語生成論』三弥井書店、一九八六年。（初出）『延慶本平家物語の語りとその位置——文末表現を中心に——』『文学・語学』八二、一九七八年六月。

⑤ 松尾華江「二つの『平家物語』から——作品形成の思想的基盤を考えるために」『軍記物語原論』笠間書院、二〇〇八年。（初出）二つの『平家物語』から——作品形成の思想的基盤を考えるために——『平家物語主題・構想・表現』（軍記文学研究叢書 六、一九九八年一〇月）

⑥ 松尾華江（第二章）源平盛衰記の世界（第三節）源平盛衰記の饒舌さ『平家物語論究』明治書院、一九八五年。（初出）「源平盛衰記の方法——その饒舌さをめぐって——」『東京女学館短期大学紀要』三、一九八一年二月。

⑦ 形容詞の連用修飾用法「批評の誘導」について渡辺実氏、鈴木泰氏の論がある。「形容詞連用形＋もくかな」の構文は『太平記』や『義経記』などでも戦場の好ましくない行為をとがめる場面でみえる。

・渡辺実「誘導の職能」『国語構文論』塙書房、一九七一年。

・鈴木泰「中古における評価性の連用修飾について」『日本語学』二・三、一九八三年三月。

⑧ 武久氏は、この章段（六末・卅四）が『発心集』に依拠していることを論じる。この「きたなし」の語は、『発心集』の表現を残したものである可能性が高い。

・武久堅「読み本系諸本（広本）の成長過程（二）——南都本から延慶本へ——」『平家物語成立過程考』桜楓社、一九八六年。（初出）『発心集』「十訓抄」と読み本系平家物語——南都本から延慶本へ——『国語と国文学』五六・七、一九七九年。

⑨ 相手が悪いと思って戦わないことを「きたなし」という例が3例ある。残る1例は、大庭三郎景親の「尻舞」（人のあとについて物事をする）とする洪屋庄司を言ったもの。

・「信連」キタナシ。寄テクメ。景高オソロシキ歎。景高「トテ切廻ルニ、ハセ組ム者コソ無リケレ。」（二中・廿一「宮被誅給事」）

・「直実」キタナシヤ、く、組ヤく、トゾ申ケル。

(五本・二十「源氏三草山并一谷追落事」)

・「家安」：ワ殿原コソ現ノ人ヨ。秩父ノ末葉トテ、口ハ開給ヘドモ、一方ノ大將軍ヲモセデ、大庭三郎ガ尻舞シテ迷行メリ。吉人ノキタナキ振舞スルヲソ人トハイワヌ。矢一筋奉ラム。

(二末・十三「石橋山合戦事」)

⑩ 覚一本の「きたなし」は次の2例である。仲間内という遠慮のない関係性の中で発せられる語である。

・案のごとく、平家、次第にくらうはなる、前後より敵はせめ来る、「きたなしや、かへせかへせ」といふやからおほかりけれ共、

(巻七「倶利伽羅落」)

・悪七兵衛是をみて、「きたない殿原のふるまいやうかな」とて、すでにくまむとかけ出けるを、

(巻九「一二之懸」)

⑪ 覚一本の言語感覚であれば、延慶本の、敵にうしろを見せることを「きたなし」と言う例(3、5)は、「まさなし」とあってよさそうな場面である。同様に先陣争いで味方を出し抜いた6(高綱)への「きたなし」も、覚一本では成田が平山を「たばかった」ことを「まさなし」と言っていた。

⑫ 「まさなし」の3(弘寛)は、名のりと連続する詞戦であり、聴衆を意識した公のやりとりでの発言である。そのため、やや理屈っぽい語である「まさなし」で相手を非難したものと考えられよう。

⑬ 「うたてさ」5例、「うたて」2例、「うたてげ」1例、「うたてあり」2例。

⑭ 自立語の延べ語数は、『平家物語総索引』および小川氏の論考によると、覚一本が一〇万九〇三語、延慶本一八万四一〇八語である。以前、小川氏の論考を引用した際(「延慶本『平家物語』における動詞」)の

『延慶本平家物語』の「まさなし」・「きたなし」と「うたてし」

る(名乗)——覚一本との比較から——『同志社国文学』八七、二〇

一七年(二月)、右の数値を誤って引用した。記してお詫び申し上げる。

・金田一春彦・清水功・近藤政美編『平家物語総索引』学習研究社、一九七三年。

・小川栄一『延慶本平家物語の日本語史的研究』、勉誠出版、二〇〇八年。

⑮ 「ウタテアリヤく」は、囃子詞のようなものか。「喜びありや、く」(謡曲「翁」大藏流・和泉流)は類例といえよう。延慶本の橋合戦と芸能については佐伯氏の論があり、悪僧達の戦闘と幸若舞曲「烏帽子折」や狂言「棒縛」の所作との共通点を指摘し、「ほとんど芸能的にも言えるパフォーマンスに類縁性を有する技」であると述べる。

・佐伯真一「異能の悪僧達——延慶本『平家物語』橋合戦の読み方——」『伝承文化の展望——日本の民俗・古典・芸能——』三弥井書店、二〇〇三年。

⑯ ただし、次の例は「うたてし」である理由が明瞭でない。忠綱は兼綱と同じ清盛配下であったため、「兼綱ともあろう人が」という落胆を込めて「うたてし」と呼びかけたものと解釈できようか。

・兼綱)上総太郎判官忠綱、「アレハ源大夫判官殿トコソ見奉ツレ。ウ」タテクモ後ヲバミセ給者哉。返サセ給へ」

(二中・十八「宮南都へ落給事」)

⑰ 城阪早紀(注1)に同じ。

⑱ 残る2例は、平家軍が富士川から逃げ上ったこと(二末・廿八)と、宗盛が命惜しさに居すまいを直すこと(六本・卅三)を言う例である。

⑲ 延慶本と同様に、心のありようを難じる例は『撰集抄』にみえる。
・死て後は、人の心のうたてさは、あらぬ色にのみうつりて、頼めし人のことは忘はて、こまぐに後世をとぶらふなさを尽ざるに、

『延慶本平家物語』の「まさなし」・「きたなし」と「うたてし」

： (卷二第三話「依妻別発心」)

・女の心のうたてさは、かなはぬに付ても、よしなき恨をふくみ、たえぬ思ひに有かねては、此世をいたづらになしはつる物なるぞかし。

(卷九第一〇話「於長谷寺逢故人」)

⑳ 地の文「2」の残る2例は、成親が流された「シヅノ屋」のみすばらしい様(二本・十三)、近衛殿が浮名を立てられたことを(三本・六)を「うたてし」と言う例である。

㉑ 会話文・心内語「2の1」の残る1例は、勸進帳を携えて法住寺殿に参上した文覚は、「奏者」であるにもかかわらず、取り次ぎをしないこと(二末・四)をいう例である。

㉒ 残る1例は、横笛が返事をせず閉じこもる時頼の「心づよさ」を「うたてし」と言う例(五末・十三)である。

㉓ 「牀ヲシテ」文意不通である。『延慶本平家物語全注釈』(注3)は、長門本の「つまはじき」とするのがよいとする。

㉔ 武久堅「法住寺合戦」の題末『平家物語・木曾義仲の光芒』世界思想社、二〇一二年。(初出)「延慶本平家物語の「法住寺合戦」、その題末」『日本文芸研究』五八・四、二〇〇七年三月。

㉕ 松尾氏の論(注6)は、「読み本系諸本」についてのものである。

㉖ 佐伯真一「有王説話と冥界訪問譚」『平家物語遡源』若草書房、一九九六年。(初出)「有王説話と冥界訪問譚」『リポート笠間』二八、一九八七年一〇月。

参考文献・引用文献

- ・中村幸彦編『角川古語大辞典』角川書店、一九八二年。
- ・中田祝夫・和田利政・北原保雄『古語大辞典』小学館、一九八三年。
- ・室町時代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典(室町時代編)』三省

堂、一九八五～二〇〇一年。

・日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』(第二版)小学館、二〇〇〇～二年。

・築島裕編『古語大鑑』東京大学出版会、二〇一一年刊行中。

・市古貞次『平家物語辞典』明治書院、一九七三年。

・小田勝「実例詳解古典文法総覧」和泉書院、二〇一五年。

・撰集抄研究会編著『撰集抄全注釈』(上・下)笠間書院、二〇〇三年。

・小山弘志・佐藤健一郎校注・訳『謡曲集一』(新編日本古典文学全集)小学館、一九九七年。

・大曾根章介・久保田淳『鴨長明全集』貴重本刊行会、二〇〇〇年。

〔付記〕 本稿は、JSPS科研費20K21999の成果の一部である。